

パーソナルコンピュータによる 『P-F スタディ解釈支援システム』

—— Microsoft Windows 版プログラムの開発 ——

湯田 彰夫

1. はじめに

心理検査の集計、解釈にコンピュータが導入されたのは、パーソナルコンピュータが普及するはるか以前、1940年代まで遡ることができる。しかし、コンピュータを利用した心理診断が盛んになったのは、1980年後半以降のことであり、この時期、*Journal of Consulting and Clinical Psychology* (1985年第53巻, Butcherら, 1985など)、*Applied Psychology: An International Review* 誌 (1987年第36巻, Stein, 1987など) で特集が生まれ、*Computerized Psychological Assessment: A Practitioner's Guide* (Butcher, 1987) といった書籍が公刊されている(湯田, 1991, p. 37)。

日本でも、ロールシャッハ・テスト(村上ら, 1988, 1991)、MMPI(村上ら, 1989)、P-F スタディ(湯田, 1989)、WISC-R(湯田ら, 1995)、MINI・MMPI-1(村上ら, 1992)等のコンピュータ診断プログラムが公開された。心理検査の中でも、特に投影法に基づく性格検査は、検査の実施・解釈に際し、検査者にかなりの時間的負担と熟練とを強いるものであり、コンピュータによる負担の軽減は検査者にとって大きな朗報であった。

筆者が作成したP-F スタディの解釈支援プログラムは、公開から既に二十年の歳月がたち、その間、パーソナルコンピュータの環境も大きく変化した。当時はNEC社製のPC-9801シリーズが大きなシェアを占めており、このプログラムもPC-9801用MS-DOS上で動作するものだった。しかし1990年代なかば以降、Microsoft社のWindowsがパーソナルコンピュータの操作環境として隆盛を極め、PC-9801シリーズは大学でもごく一部、実験機器の制御などの用途で用いられているのみで、今ではほとんど見かけることはない。公開から二十年たった今日でも、このプログラムについて年に数件の問い合わせがあり、その度にWindows環境への移植の必要性を感じていた。また、児童版の検査に関しては、2006年にほぼ検査内容を一新する大規模な改訂がなされ、その点への対応も必要だった。そこで、今回改めてMicrosoft社のWindowsに対応したプログラムを作成し、公開する次第である。

2. P-F スタディについて

P-F スタディは絵画欲求不満検査 (Picture-Frustration Study) の略称で、ワシントン大学のソール・ローゼンツァイク (Saul Rosenzweig) が自らの欲求不満理論に基づいて 1945 年に発表したものである (ローゼンツァイク, 2006)。日常生活の中で誰もがごく普通に経験する可能性のある欲求不満場面における反応の特徴から、その人の人格の独自性を明らかにしようというもので、ロールシャッハ・テスト、絵画統覚検査 (TAT)、文章完成法 (SCT) 等と同様、心理検査の中では投影法による性格検査に分類される。被験者として想定される検査対象としては、非行傾向のある子ども、親子関係に問題があると思われる家族、内因性精神疾患以外の精神科が対象とする患者、即ち神経症者、性格異常者、アルコール依存症患者等があげられ、臨床現場で用いられる性格検査としてはロールシャッハ・テスト、矢田部-ギルフォード性格検査について多用されている (細木, 1985)。

日本版は住田勝美・林勝造らによって児童用 (4~14 才) が 1955 年に、成人用 (15 才以上) が 1956 年に、また 1987 年に青年用 (中学生~大学生) が標準化された。2006 年には児童用が全面的に改訂され、検査対象が小学校一年生から中学三年生までとなり、刺激図版も全面的に改められた。検査用紙および解説書 (林ら, 2007) はいずれも京都の三京房より刊行されている。

本検査は児童用、青年用、成人用ともに漫画風に描かれた 24 の欲求不満場面から構成され、いずれの絵でも左側の話しかけている人物が右側の人物に何らかの意味で欲求不満を感じさせている。被験者の行なう作業は右側の人物にとってふさわしいと思われる答えを、空白の吹き出しの中に書き込むことである。検査に要する時間はおよそ 20 分から 40 分程度で、個別、集団のいずれでも実施可能である。結果の処理、解釈に要する時間は 30 分から 1 時間程度で、投影法による他の性格検査に較べると処理、解釈ともに容易な方だが、それでも集団で実施した場合などかなりの労力を強いられる。結果の処理は、被験者の反応のスコアリング、スコアリングされた反応の集計と各指標の算出、解釈という 3 つの段階にわけられるが、ここで紹介する『P-F スタディ解釈支援システム』はスコアリング以降の過程をパーソナルコンピュータに肩代りさせようというものである。

検査の実施法、スコアリング、結果の集計、解釈についての詳細は解説書に譲るが (林ら, 2007, 秦, 2007 など)、以下、簡単に概略を述べておく。

(1) テスト場面の構成

24 の欲求不満場面は「人為的、非人為的な障害によって直接に自我が阻害されて欲求不満を引き起こしている」自我阻害場面 (Ego-Blocking Situation) と、「誰か他の者から非難、詰問され、いわゆる超自我 (良心, Superego) が阻害されて欲求不満を招いた」超自我阻害場面 (Superego-Blocking Situation) に二分される。

(2) 実施法

いずれの場面も、左側の人間の言っていることに対して、右側の人間が何と答える

かを、図中の空白の吹き出しに記入させる。

(3) スコアリング

24 場面における反応の内容を、アグレッション(攻撃)の方向がどちらを向いているか、どのような型のアグレッションが示されているかという 2 つの次元で分類し、記号で表示する。2 つの次元はそれぞれ次のような 3 つのカテゴリーからなり、それらの反応タイプの組み合わせから 9 つの評点因子ができるが、2 つの変形(超自我評点 E、I)があるので、評点因子の総計は 11 になる。

アグレッションの方向(Directions of Aggression)

1. 他責的反応(E-A, Extraggression)

欲求不満の原因を他人や環境のせいにする反応。

2. 自責的反応(I-A, Intraggression)

欲求不満の原因を自分の責任に帰す反応。

3. 無責的反応(M-A, Imaggression)

欲求不満の原因を自分にも周囲にも求めることなく、欲求不満をうまくごまかしたり、うわべを繕ったりして攻撃を避ける反応。

アグレッションの型(Types of Aggression)

1. 障害優位型(O-D, Obstacle-Dominance)

欲求不満に対する自我の表明を避け、障害の指摘・強調にとどめた反応。

2. 自我防衛型(E-D, Ego-Defense or Etho-Defense)

ストレスを解消するために、自我を強調した反応。

3. 要求固執型(N-P, Need-Persistence)

なんらかの形で欲求不満の解決を志向した反応。

(4) 結果の整理

スコアリングが終了したら、次の要領で結果を整理する。

1) プロフィール欄

各評点因子の出現数を前半 12 場面、後半 12 場面において集計し、ついで両者の合計を求める。更にアグレッションの方向および型の 3 カテゴリーそれぞれにつき、出現比率を算出する。

2) GCR(集団順応度、集団一致度、Group Conformity Rating)

あらかじめ設定されている標準評点との一致度を調べ(児童用は 18 場面、青年用は 13 場面、成人用は 14 場面)、GCR を算出する。

3) 超自我因子欄

超自我評点の出現率、および関連する指標の出現率を算出する。

4) 反応転移分析欄

それぞれの評点因子、カテゴリーの出現率が、検査の前半と後半でどのように変化しているかを調べるため、反応転移値を算出する。

5) 主要反応

主要反応は、2006 年に改訂された児童用・第Ⅲ版で導入された新しい指標である。評点因子の中で出現数の多いものを、上から順に 3 位まで選び、出現数と共に記入する。

3. プログラムについて

(1) プログラムのインストールと削除

プログラムは、Visual Studio 2008 Professional Edition 所収の Visual Basic 2008 で作成されている。Microsoft .NET 対応アプリケーションとなるので、実行には Microsoft .NET Framework 3.5 がインストールされている必要がある(2009 年 1 月時点)。

プログラムの動作確認は、Windows Vista Business Edition、Microsoft Windows XP Professional Version Service Pack 3、Microsoft Windows XP Home Edition Service Pack 3 で行った。

プログラムをインストールするには、配布パッケージに収められている専用インストーラーである P-FStudy.msi をダブルクリックする。インストールする環境に上記の Microsoft .NET Framework 3.5 が導入されていない場合、Microsoft 社のサーバーから取得するかどうかを確認するアラートが表示される(図 1)。ネットワークに接続されている場合には、「はい」を選択すると、Microsoft 社のページが Web ブラウザによって開かれるので、ダウンロード、インストールへと進むことができる。この場合には、.NET Framework 3.5 を導入後、あらためて P-FStudy.msi をダブルクリックし、P-FStudy をインストールする。



図 1 .NET Framework 3.5 の取得を促すアラート

P-FStudy.msi を起動すると、セットアップウィザードが立ち上がるので、指示に従ってインストールを完了する。インストール先のフォルダはデフォルトでは「C:\Program Files\P-FStudy\」となっているが、任意のフォルダを指定することができる(図 2)。

インストール先のフォルダには実行プログラムである P-F Study.exe の他、いくつかのファイルとサンプルデータを収めた sample フォルダがコピーされる。sample フォルダ以外はすべて実行プログラムと同じフォルダに置かれる必要がある。インストール作業が終了すると、メニュー(「スタート」 - 「すべてのプログラム」)とデスクトップ

プに、実行ファイルへのショートカット(P-F Study)が作成されるので、プログラムを実行するにはこれをマウスで選択しクリックすれば良い。もちろん、Explorer でインストールフォルダを開き、P-F Study.exe をダブルクリックしてもよい。プログラムの終了は、通常の Windows アプリケーション同様である。



図2 インストールフォルダの選択画面

プログラムを削除する場合は、Windows XP では、コントロールパネルの「プログラムの追加と削除」から「P-FStudy」を選択し削除ボタンをクリックする。Vista の場合は、コントロールパネルの「プログラムのアンインストール」から削除する。

(2) プログラムの配布

プログラムの配布とメンテナンス情報の公開は、

<http://azumi.shinshu-u.ac.jp/pf/>

でおこなう予定である。

(3) 検査データの入力

プログラムは、「入力」「解釈」「集計表」の3つのタブで構成されている。起動画面は図3のように、「入力」タブが選択されているので、被検査者の氏名、年齢、性別、生年月日、検査の種類（児童用、青年用、成人用の区別）、年齢層（児童用の場合、学年区分。青年用の場合、学校区分）、検査者名、検査の所要時間、検査日等のデータと、24場面の評点を入力する。

P-F Study

ファイル 印刷

入力 解釈 集計表

P-Fスタディ 解釈支援システム (Ver. 1.0.12)

氏名	06年版解説, p.274	年齢	9:2	生年月日	
検査の種類	児童用	年齢層	小学校3年	性別	男
検査者	MN	所要時間	11'	検査日	

集計

	障害優位型	自我防衛型	要求固執型		障害優位型	自我防衛型	要求固執型
1		E	e	13		E	
2			m	14		E	
3		E		15	I'		
4			e	16	M'		
5	M'		i	17		E	
6		E		18			
7		E		19	E'		
8			i	20	I'		
9		E:E		21	M'		
10		E		22	E:I'		
11			m	23	E:M'		
12		E		24	I:M'		

集計

図3 データ入力画面

評点以外で必須のデータは性別、検査の種類、年齢層（成人用以外）だけで、その他の項目は省略もしくは任意の文字列を入力することができる。これは、性別、検査の種類、学年区分、学校区分によって、参照する基準データが異なるためである。

検査の種類と性別は入力フィールド右端をマウスでクリックすると選択肢が出てくるので、選択したい項目をマウスでクリックする。検査の種類で「児童用」もしくは「青年用」を選択した場合、図4のようなポップアップ・ウィンドウが現れるので、学年区分もしくは学校区分をマウスで指定すると、年齢層のフィールドに対応する文字列が自動的に挿入される。検査の種類と性別に関しては、未選択の場合、その旨、エラーメッセージが表示される。

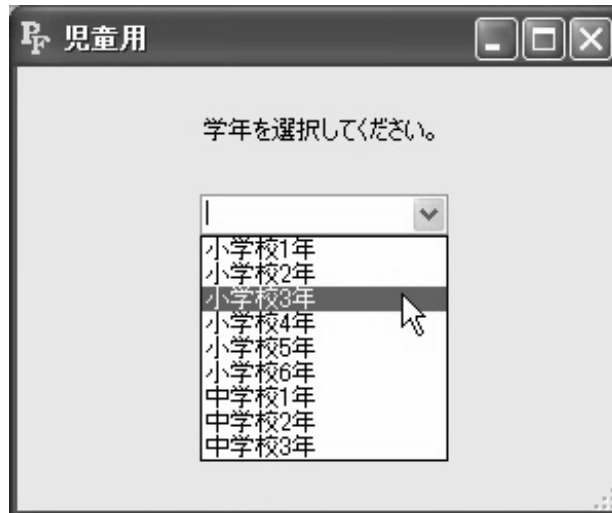


図4 学年を選択するポップアップ・ウィンドウ

スコアリングされた評点は、各場面毎にマウスで選択することで入力する。入力フィールドの右端をクリックすると、選択可能な記号のドロップダウン・リストが表示されるので、該当する項目を選択する（図3）。選択可能な記号は、次の通りである。

障害優位型

「E」 「I」 「M」 「E:I」 「E:M」 「I:M」

自我防衛型

「E」 「I」 「M」 「E:I」 「E:M」 「I:M」 「E_」 「I_」 「E:E_」 「E:I_」 「E_:I」 「E_:I_」 「E_:M」
「I:I_」 「I_:M」

要求固執型

「e」 「i」 「m」 「e:i」 「e:m」 「i:m」

反応が欠落している場合およびスコアリング不可能な場合には、障害優位型、自我防衛型、要求固執型とも空白とする。この場面は後の集計処理からは除外され、有効場面数等も修正されたものが用いられる。

ただし評点の入力に関しては、次のような制約がある。

- 1) 超自我評点 I、E のアンダーラインは表示不可能なので、「_」（アンダースコア）で代用し、E_ および I_ と表記する。
- 2) 3 つ以上の評点からなる組み合わせ評点や、融合評点は受け付けない。つまり E' //i や /E:I/ といった 2 つの評点からなる組み合わせ評点は許容されるが、E' /E/e といった 3 つの評点からなるスコアは認められない。経験上、このようなケースは稀であるし、3 つ以上のスコアリングが可能な場合でも、2 つの組み合わせ評点にすることが原則となっているからである（林ら，2007，p. 208）。
- 3) 児童用・第Ⅲ版から、同じアグレッションの型内で 2 つのスコアをつける場合、/E;M/ のようにセミコロンで区切ることになっているが（林ら，2007，p. 201）、本プログラムでは従来通り、コロンで区切っている。

評点の修正については、次の点に注意して欲しい。評点を選択した後で誤入力に気づいた場合は、改めて正しい記号をドロップダウン・リストから選択すればよい。また、誤って評点を入力してしまってから、その欄を空白としたい場合、ドロップダウン・リストの一番下にある空白行を選択する必要がある。入力された記号をキーボードから修正したり、削除したりしても、それらは入力データには反映されないため、必ずドロップダウン・リストから選択する必要がある。

データの入力が終了したら、必要な集計作業、解釈文を作成するために、評点入力フィールドの上下に配置されている集計ボタンをクリックするか、メニューから「ファイル集計 (Ctrl+E)」を選択する。

同一場面で3つ以上のスコアが入力された場合、入力フィールドの下に、赤い文字で、

「* が表示されているデータを修正してください。」

とメッセージが表示されると共に、該当する場面の右端に「*」が表示される。

入力データに問題がない場合、「集計表」タブに画面は切り替わり、プロフィール欄ほか、各種指標が表示される。

(4) 結果の出力

結果は被検査者の個人属性、場面別評点、解釈文（以上「解釈タブ」）、評点のプロフィール、集団順応度、超自我阻害場面における集団順応度、超自我因子、反応転移分析、主要反応（以上「集計表タブ」）の順で出力される（図5、図6）。

場面別評点出力欄では、24の場面のうち超自我阻害場面に相当するものについて、場面番号の左横にアスタリスク（*）を付けて識別できるようにしてある。またあらかじめ設定されているGCRの標準評点も、各場面の右端に出力される。

プロフィール欄の各評点の出現数、アグレッションの方向と型別の出現比率、GCRスコア、超自我因子については、平均値±1標準偏差に入るものを標準範囲とし、それを越える場合はプラス（+）を、下回る場合はマイナス（-）を出力している。各出力欄の下あるいは右には、被検査者の属する母集団における平均値と括弧内に標準偏差が出力される。平均値の左の記号は母集団を示し、例えばj:mの場合、青年用・中学生・男性の基準データであることを示している（コロンの左が検査の種別と年齢層、右は性別となる）。性別のmは男性（male）を、fは女性（female）を意味している。検査の種別と年齢層の記号は、表1に示す通りである。中学の「j」は junior high school の、高校の「h」は high school の、大学の「u」は university の頭文字である。

反応転移については、転移が認められた項目に転移値と転移の方向が出力される。前半に出現頻度が多い場合には左向きの矢印（<=>）が、後半に出現頻度が多い場合には右向きの矢印（=>）が表示される。統計的な有意性を示すために、転移値の絶対値が0.5以上の場合は右端にアスタリスク（*）が、0.33から0.5までの場合にはプラス（+）の記号が出力される。転移が認められない項目には、nsが表示される。

表 1 出力欄における母集団記号

児童用		青年用	
小学校 1 年	1	中学	j
小学校 2 年	2	高校	h
小学校 3 年	3	大学	u
小学校 4 年	4		
小学校 5 年	5		
小学校 6 年	6		
中学校 1 年	j1		
中学校 2 年	j2		
中学校 3 年	j3		

主要反応は、出現頻度が高い上位 3 位までの評点を記入することになっているが、同点が生じる場合も考慮して、本プログラムでは上位 5 位まで、評点記号と出現数を表示している。

解釈文は GCR、アグレッションの方向、アグレッションの型、各評点因子の出現頻度、超自我因子の順に、標準範囲から逸脱した項目をチェックする形で出力される。いずれの項目も、それぞれ標準範囲以下、標準範囲、標準範囲以上に分けて解釈文を作成している。解釈文全体の長さは 500 字から 1400 字程度で、標準範囲から逸脱する項目が多くなるほど解釈文も長くなる。またそれぞれの項目がどのくらい逸脱しているかがわかるように、標準偏差を単位として文中に逸脱の程度が表示される。解釈文は『P-F スタディ解説』（林ら，2007）に記載されている表現にほぼ準拠している。

(5) データの保存と結果の印刷

入力データを保存する場合は、ファイル・メニューの「保存」をマウスで選択する。保存先のフォルダが表示されるので、通常の Windows アプリケーションと同様の方法でファイル名を指定すれば良い。保存されたデータを読み込む場合も、ファイル・メニューの「開く」をマウスで選択すると、「ファイルを開く」ためのダイアログが表示される。保存されるのは入力データだけで、結果については保存されない。

結果の印刷は、メニューの「印刷」から行う。プリンタの選択が必要な場合は、まず「印刷設定」を選択する。プリンタの設定が不要な場合は、「印刷（集計表）」、「印刷（解釈）」、「印刷（両方）」のいずれかを選択する。これらはいずれの場合も画面のイメージをハードコピーしたものなので、文字を美しく印刷することができない。

Microsoft 社の Excel がインストールされている場合は、Excel の印刷機能を用いてスケラブルフォントによる印刷が可能である。メニューから「印刷」－「Excel で表示」を選択すると、集計結果がテンプレートファイル（プログラムをインストールしたフォルダの PF_Result.xlt）に送られ、Excel で集計表が表示される。A4 用紙 2 ページに収まるようにレイアウトしてあるが、プリンタによっては調整が必要な場合が

ある。開かれた Excel のブック形式のファイルは 1 枚目のシートにデータが書き込まれ、そのデータに基づいて 2 枚目のシートの集計表が作成される (図 7 参照)。1 枚目のシートのデータは、再利用しやすいように見出し行をつけて 1 行にまとめてある。

4. 実行例

次に実行例として、2 つの事例の検査結果を紹介する。

(1) 事例 1 小学校 3 年生の男子

これは『P-F スタディ解説 (2006 年版)』で解釈事例として取り上げられている事例である。「実母は 18 歳時に本児を出産するが、育児は放任がちであったため、主として父方祖母が養育。しかし、父方祖父母の離婚に伴ない、生後半年後から父方親族宅に預けられる。3 歳時、本児は父親と継母との再婚を機に引き取られる。本児は継母に愛着を示す一方で、反抗的で扱いにくく、ことばで注意してもきかないことを理由に体罰が始まり、継母は本児に次第に拒否感情を強める。7 歳 2 月時、父親が継母と離婚したため、養育困難を理由に養護施設に入所する。しかし、入所間もなくから窃盗、怠学が始まり、情意面では衝動のコントロールが悪く、些細な刺激で興奮してパニックを起こしたり、他児に攻撃的な言動をとる傾向が目立ち、処遇検討のための参考に本検査を実施」(林ら, 2007, p. 274)した。

プログラムの実行結果は、図 5、図 6 に示すとおりである。以下に、本プログラムが出力した解釈文を示す。

【集団順応度】

GCR%は標準範囲を下回っており(-2.4SD)、日常的な欲求不満場面でごく普通の常識的な対応ができないことを示している。

【アグレッションの方向】

アグレッションの方向について見ると、他責的反応と無責的反応は標準範囲に入るが、自責的反応は標準範囲を下回っている(-1.8SD)。つまり欲求不満の原因を他者や状況に求める点については問題ないが、自責の念に乏しく自分の責任を省みない傾向が強い。

【アグレッションの型】

障害優位型、自我防衛型、要求固執型のすべてが標準範囲に入っており、全体としてのアグレッションの型に関しては目だった特徴は指摘できない。

【各評点因子の出現頻度】

他責逡巡反応(E')の出現頻度が標準範囲を下回っている(-1.1SD)、欲求不満場面に遭遇しても問題解決を図れなくなるほど状況に打ちのめされてしまうことはない。

無責逡巡反応(M')の出現頻度は標準範囲を上回っている(1.5SD)。このことは他者にも自分にもアグレッションの矛先を向けることなく、失望や不満の表明を最小

限

P-F Study

ファイル 印刷

入力 解釈 集計表

P-Fスタディ 解釈支援システム

氏名	ケース1	年齢	9:2	生年月日	
検査の種類	児童用	年齢層	小学校3年	性別	男
検査者	MN	所要時間	11'	検査日	

	障害優位型	自我防衛型	要求固執型	GCR		障害優位型	自我防衛型	要求固執型	GCR
01		E	e		*13		E		
02			m	e	*14		E		M:E
03		E			15	I'			I'
04			e	e	16	M'			M
05	M'		i		17		E		m
*06		E		e	18	M'			
*07		E		I	*19		E		I
*08			i	I	20		E	e	M
09		E:E		e	21	M'			e
10		E		I	*22		E		I
11			m	I	23		M		
*12		E		E	24		E	m	m

【集団順応度】
GCR%は標準範囲を下回っており(-2.4SD)、日常的な欲求不満場面でご普通の常識的な対応ができないことを示している。

【アグレッションの方向】
アグレッションの方向について見ると、他責的反応と無責的反応は標準範囲に入るが、自責的反応は標準範囲を下回っている(-1.8SD)。つまり欲求不満の原因を他者や状況に求める点については問題ないが、自責の念に乏しく自分の責任を省みない傾向が強い。

【アグレッションの型】
障害優位型、自我防衛型、要求固執型のすべてが標準範囲に入っており、全体としてのアグレッションの型に関しては目立った特徴は指摘できない。

【各評点因子の出現頻度】
他責逡巡反応(E)の出現頻度が標準範囲を下回っている(-1.1SD)、欲求不満場面に遭遇しても問題解決を図れなくなるほど状況に打ちのめされてしまうことはない。
無責逡巡反応(M)の出現頻度は標準範囲を上回っている(1.5SD)。このことは他者にも自分にもアグレッションの矛先を向けることなく、失望や不満の表明を最小限にとどめ、うまくうわべを取り繕うことでその場を収めようとする傾向が強いことを示している。
他罰反応(E)の出現頻度は標準範囲を上回っている(2.3SD)。つまり欲求不満場面に遭遇した場合に他者や周囲の状況に原因を求める傾向が強く、必要以上の攻撃性・自己主張性を示しがちである。
自罰反応(I)の出現頻度は標準範囲を下回っている(-2.2SD)。つまり欲求不満場面に遭遇した場合にその原因を自分自身に率直に帰属しようという姿勢に欠け、自責の念・自己反省心に乏しい。なおこの点については、自責固執反応(i)

図5 事例1の処理結果－解釈タブ

にとどめ、うまくうわべを取り繕うことでその場を収めようとする傾向が強いことを示している。

他罰反応 (E) の出現頻度は標準範囲を上回っている (2.3SD)。つまり欲求不満場面に遭遇した場合に他者や周囲の状況に原因を求める傾向が強く、必要以上の攻撃性・自己主張性を示しがちである。

自罰反応 (I) の出現頻度は標準範囲を下回っている (-2.2SD)。つまり欲求不満場面に遭遇した場合にその原因を自分自身に率直に帰属しようという姿勢に欠け、自責

の念・自己反省心に乏しい。なおこの点については、自責固執反応 (i) の出現頻度を

P-F Study										
ファイル 印刷										
入力 解釈 集計表										
プロフィール										
	障害優位型		自我防衛型		要求固執型		合計		%	
他責型	0.0	0.0	6.5	12.5	1.5	2.0	8.0	14.5	60.4	
	0.0		6.0		0.5		6.5			
	3:m:1.6(1.5) -		3:m:5.3(3.1) +		3:m:4.3(1.9) -		////////		3:m:47.9(14.1)	
自責型	0.0	1.0	0.0	0.0	1.5	1.5	1.5	2.5	10.4	-
	1.0		0.0		0.0		1.0			
	3:m:1.3(0.8)		3:m:3.7(1.7) -		3:m:0.9(1.2)		////////		3:m:25.5(8.6)	
無責型	0.5	3.5	0.0	1.0	2.0	2.5	2.5	7.0	29.2	
	3.0		1.0		0.5		4.5			
	3:m:1.6(1.3) +		3:m:1.8(1.4)		3:m:2.8(1.4)		////////		3:m:26.6(10.1)	
合計	0.5	4.5	6.5	13.5	5.0	6.0	12.0	24.0	100.0	
	4.0		7.0		1.0		12.0			
%	18.8		56.3		25.0		100.0		////////	
	3:m:19.3(8.2)		3:m:46.3(12.6)		3:m:34.4(11.6)		児童用 小学校3年 男 (3:m)			
集団順応度		GOR = 4.5 / 18 = 25.0% - [3:m: 55.08 (12.67)] (GOR in Superego Blocking Situations = 2 / 7)								
超自我因子										
E ₋ = 0.5 = 2.1% [3:m: 3.3 : (3.6)]					I ₋ = 0.0 = 0.0% [3:m: 4.8 : (5.3)]					
E ₋ + I ₋ = 0.5 = 2.1% [3:m: 8.1 : (6.5)]					E - E ₋ = 12.0 = 50.0% [3:m: 19.2 : (12.8)] +					
I - I ₋ = 0.0 = 0.0% [3:m: 11.2 : (7.0)] -					(M-A) + I ₋ = 7.0 = 29.2% [3:m: 31.4 : (10.0)]					
反応転移分析										
E', I', M'		E' : ns			I' : ns			M' : ==> -71*		
E, I, M		E : ns			I : ns			M : ns		
e, i, m		e : ns			i : ns			m : ns		
E-A, I-A, M-A		E-A : ns			I-A : ns			M-A : ns		
O-D, E-D, N-P		O-D : ==> -78*			E-D : ns			N-P : <== 67*		
主要反応										
E (12.5)		M' (3.5)		m (2.5)		e (2.0)		i (1.5)		

図6 事例1の処理結果—集計表タブ

考慮に入れる必要がある。

他責固執反応 (e) の出現頻度は標準範囲を下回っている (-1.2SD)。従って欲求不満場面に遭遇しても問題の解決を周囲に任せきってしまったたり、過度に依存的になってしまったりすることはない。

【超自我因子】

(E-E₋%)が標準範囲を上回っていることは (2.4SD)、精神発達が未成熟で幼稚な攻撃性を備えていることを示している。

(I-L%)が標準範囲を下回っていることは(-1.6SD)、自責の念・自己反省心に乏し

P-Fスタディ 解釈支援システム									
氏名	ケース2	年齢	24歳	生年月日					
検査の種類	成人用	年齢層		性別	男				
検査者	所要時間		検査日						
	障害優位型	自我防衛型	要求固執型	GCR		障害優位型	自我防衛型	要求固執型	GCR
01		E		M	13			m	E
*02	I'			I	14			m	
03	M'				15		I	m	M
04	M'	M		M	*16		E		
*05			i	i	*17		I		
06			e		18		M		
*07			e	E	*19		L		I
08	M'				20		M		
09			i		*21	I'	I		I'
*10		E		E	22	M'			M'
11	E'			M	23	E'			m
12			m		24	M'			M'M

【集団順応度】
GCR%は標準範囲を下回っており(-1.2SD) 日常的な欲求不満場面でごく普通の常識的な対応ができないことを示している。

【アグレッションの方向】
アグレッションの方向について見ると、他責の反応と自責の反応は標準範囲に入るが、無責の反応は標準範囲を上回っている(1.1SD)。つまり欲求不満場면을不可避の許容すべき出来事としてとらえ、原因を曖昧なままに済ませてしまう傾向が強い。

【アグレッションの型】
アグレッションの型について見ると、障害優位型と要求固執型は標準範囲に入るが、自我防衛型は標準範囲を下回っている(-1.6SD)。つまり建設的であるかどうかは別として問題解決を志向した反応は適度に認められるが、ストレスを解消するために寧ろに自我を強調した反応は少ない。

図7 事例2の処理結果-Excelによる表示

いことを示している。

(2) 事例2 24歳男性

本事例は24歳の男性で高校卒業後、印刷会社に勤務している。「会社へ行く気分が落ち込んだり高ぶったり、情緒不安定になってしまう」と訴え、精神科外来を受診した。受診の半年くらい前から同僚の女性のことが気にかかるようになり、デートに誘ったが断られ憂鬱な気分になった。その後、その女性に対する嫉妬心からささいなことで

同僚とトラブルを起こすようになり、「その女性にのぼせ仕事がおろそかになってい

P-F Study										
ファイル 印刷										
入力 解釈 集計表										
プロフィール										
	障害優位型		自我防衛型		要求固執型		合計		%	
他責型	1.0	2.0	2.0	3.0	2.0	2.0	5.0	7.0	29.2	
	1.0		1.0		0.0		2.0			
	m2.1(1.4)		m5.6(2.7)		m1.8(1.1)		////////		m40.3(13.1)	
自責型	1.0	1.5	0.0	3.0	2.0	2.0	3.0	6.5	27.1	
	0.5		3.0		0.0		3.5			
	m1.7(0.9)		m3.5(1.4)		m1.5(0.9)		////////		m27.0(7.9)	
無責型	2.5	4.5	0.5	2.5	1.0	3.5	4.0	10.5	43.8	+
	2.0		2.0		2.5		6.5			
	m2.3(1.2) +		m3.1(1.6)		m2.4(1.4)		////////		m33.1(9.7)	
合計	4.5	8.0	2.5	8.5	5.0	7.5	12.0	24.0	100.0	
	3.5		6.0		2.5		12.0			
%	33.3		35.4		31.3		100.0		////////	
	m24.8(9.6)		m51.3(10.0) -		m23.1(11.3)		成人用 男(m)			
集団順応度		GCR = 6 / 14 = 42.9% - [m: 58.20 (12.30)] (GCR in Superego Blocking Situations = 3.5 / 6)								
超自我因子										
E ₋ = 0.0 = 0.0% [m: 4.7 : (3.2)] -					I ₋ = 1.0 = 4.2% [m: 7.0 : (4.8)]					
E ₋ + I ₋ = 1.0 = 4.2% [m: 11.7 : (5.3)] -					E - E ₋ = 3.0 = 12.5% [m: 18.6 : (11.7)]					
I - I ₋ = 2.0 = 8.3% [m: 7.5 : (4.7)]					(M-A) + I ₋ = 11.5 = 47.9% [m: 40.6 : (9.9)]					
反応転移分析										
E', I, M'		E' : ns			I' : ns			M' : ns		
E, I, M		E : ns			I : ==> -1.00*			M : ns		
e, i, m		e : ns			i : ns			m : ==> -43+		
E-A, I-A, M-A		E-A : <== 43+			I-A : ns			M-A : ns		
O-D, E-D, N-P		O-D : ns			E-D : ==> -41+			N-P : <== 33+		
主要反応										
M' (4.5)		m (3.5)			E (3.0)		I (3.0)		M (2.5)	

図 8 事例 2 の処理結果 - 集計表タブ

る」という理由で1ヶ月の休職を命じられ、同時に精神科の受診を勧められた。ロールシャッハ・テストの所見では「対人関係に際して自発性を欠いた表面的な態度を取りがちで、他者との関係を通して欲求を処理したり、自己を主張したりすることができない。その根底には自己不確実感、自信の欠如から来る不安があり、欲求を極度に抑圧しているため、ますます円滑で親密な人間関係を営めないという悪循環に陥っている。このような傾向は異性に対してだけでなく、同性に対してもあてはまる」と結論されている。なお WAIS による知能指数は 95 だった。

プログラムの実行結果は、図 7、図 8 に示すとおりである。以下に、本プログラムが出力した解釈文を示す。

【集団順応度】

GCR%は標準範囲を下回っており(-1.2SD)、日常的な欲求不満場面でごく普通の常識的な対応ができないことを示している。

【アグレッションの方向】

アグレッションの方向について見ると、他責的反応と自責的反応は標準範囲に入るが、無責的反応は標準範囲を上回っている(1.1SD)。つまり欲求不満場面を不可避の許容すべき出来事としてとらえ、原因を曖昧なままに済ませてしまう傾向が強い。

【アグレッションの型】

アグレッションの型について見ると、障害優位型と要求固執型は標準範囲に入るが、自我防衛型は標準範囲を下回っている(-1.6SD)。つまり建設的であるかどうかは別として問題解決を志向した反応は適度に認められるが、ストレスを解消するために率直に自我を強調した反応は少ない。

【各評点因子の出現頻度】

無責逡巡反応(M')の出現頻度は標準範囲を上回っている(1.8SD)。このことは他者にも自分にもアグレッションの矛先を向けることなく、失望や不満の表明を最小限にとどめ、うまくうわべを取り繕うことでその場を収めようとする傾向が強いことを示している。

【超自我因子】

(E_%)の出現率が標準範囲を下回っていることは(-1.5SD)、他者から非難・叱責を受けた場合にそれが不当なものであっても、積極的に攻撃に転じたり、自己を主張したりすることができないことを示している。

(E_+I%)は標準範囲を下回っている(-1.4SD)。このことは自我を主張し自分を積極的に守れないことを示し、社会性の発達が遅れていることをうかがわせる。

5. おわりに

心理検査の実施・解釈と心理診断とは、異なるプロセスであるという指摘がある。心理診断を強調する立場では、心理検査は検査対象者のパーソナリティ、能力、独自性を理解するための一手段であり、その他の利用可能なデータ(行動観察、面接記録、生育史、病歴など)と共に、統合的な解釈をおこなう上での材料と考える。

本プログラムも完成された検査レポートを出力する自動診断システムではなく、検査結果の解釈を容易にするための解釈支援プログラムとして位置づけられるべきものであり、コンピュータが出力する解釈文をそのまま報告書として使用するのではなく、臨床家の責任において解釈文を取捨選択し、関連する情報を統合した後に最終的な報告書を作成することが必要である(湯田, 1991, p. 43-44)。プログラムが行なっていること自体は四則演算と条件判断の繰り返しであるが、手作業で評点の集計、各種指

標の計算、解釈を行なう労力を考えると、本プログラムが出力する解釈文は叩き台としては満足できるものであり、充分、実用に耐えるシステムとして利用可能であると思われる。

参考文献

- Butcher, J.N.(ed), 1987, *Computerized Psychological Assessment: A Practitioner's Guide*, New York: BASIC BOOKS
- Butcher, J.N., Keller, L.S. & Bacon, S.F. , 1985, Currents Developments and Future Directions in Computerized Personality Assessment, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, pp.803-815
- 秦一士, 2007, 新訂 P-F スタディの理論と実際, 北大路書房
- 林勝造(著者代表), 2007, P-F スタディ解説 2006年版, 京都: 三京房
- 細木照敏, 1985, 心理テストの選択と適用, 野上芳美(編), 心理検査法, 金原出版
- 村上千恵子, 村上宣寛, 1988, ロールシャッハの自動診断システム, *Information*, vol.7, No.2, pp.115-124
- 村上宣寛, 村上千恵子, 1989, MMPI 自動診断システム—心理診断の自動化, *Information*, vol.8, No7, pp.97-108
- 村上宣寛, 村上千恵子, 1991, ロールシャッハ・テスト—自動診断システムへの招待, 日本文化科学社
- 村上宣寛, 村上千恵子, 1992, コンピュータ心理診断法—MINI, MMPI - 1 自動診断システムへの招待, 学芸図書
- ローゼンツァイク, S. (秦一士訳), 2006, 攻撃行動と P-F スタディ, 北大路書房
- Stein, S.J., 1987, Computer-assisted Diagnosis in Children's Mental Health, *Applied Psychology : An International Review*, 36, pp.343-356
- 湯田彰夫, 1989, パーソナルコンピュータによる『P-F スタディ解釈支援システム』, *Information*, vol.8, No7, pp.109-116
- 湯田彰夫, 1991, コンピュータによる心理診断の現状と展望, 長野大学紀要, vol.12, No4, pp.37-46
- 湯田彰夫, 音山若穂 (上野一彦監修), 1995, WISC-R 知能検査解釈支援システム, 日本文化科学社

(信州大学 全学教育機構 准教授)

2009年2月19日 採録決定